

## マリアナ・ピネーダ、グラナダの自由の殉教者 — その実像と伝説化 —

岡住 正秀

ああ、なんと悲しき日か。  
グラナダでは石ころさえも泣いている。  
マリアニータは供述しなかったから  
処刑台で死んでしまう。

### はじめに

これは 19 世紀 30 年代半ばころから謡われた、いわゆる盲人たちのロマンセ（中世スペインに起源をもつ 8 音節詩句の叙事詩）の一節である。詩人ガルシア・ロルカが書いた戯曲『マリアナ・ピネーダ—三つの版画のなかのロマンセ』（1）は、このロマンセに始まりこれで終わる。グラナダの一女性マリアナ・ピネーダは、1831 年 5 月 26 日、自由主義者の陰謀・蜂起に加担したかどで処刑された。警察当局が家宅捜索で発見した「自由・平等・法」の刺繍入りの旗が、国家に対する反逆罪の証とされたからだ。

19 世紀グラナダの悲劇のヒロインの名を不朽のものとしたのは、くしくも 20 世紀グラナダの悲劇の主人公、内戦勃発時に暗殺されたガルシア・ロルカであった。民衆の間で語り継がれたロマンセから着想を得たロルカは、1925 年に戯曲を完成させると、2 年後にマリアナ・ピネーダを舞台に登場させる。初演はバルセローナのごや劇場であった。舞台装置・衣装は、友人サルバドール・ダリが担当する。そして 31 年、第二共和制発足の最初の数ヶ月間、「マリアナ・ピネーダ」がグラナダはもちろん、マドリードなどでも上演され、「自由の殉教者」マリアナの名があらためて人々の記憶に蘇ることになる。

この伝説的人物については、グラナダ生まれの女流作家アントニーナ・ロドリゴが一九六五年に著した伝記がある。ロドリゴは、マリアナにまつわるロマンセを収集・調査し、利用しうるあらゆる史料でその短くも波乱の生涯を語ってくれる。歴史書でマリアナが言及されるとき、ロドリゴの作品が参照される。その伝記も初版が刊行されて以来版をかさね、その間に著者の精力的な史料渉獵の結果、そのつど巻末に新史料が補完されるとともに、本文にも加筆・修正が加えられて改訂版が出されてきた（2）。けだしロドリゴにとってはライフ・ワーク的作品である。

しかし、グラナダの歴史家ガイ・アルメンテローらがかつて指摘したように、ロドリゴの描く

マリアナ・ピネーダは、ロマン主義の光輪に包み込まれ、その人物像や周辺がいくぶんか歪曲されて曖昧な面もつきまとい、現実は何が起きたのかについては見えない部分が依然として残る(3)。悲劇のヒロインの行動と思想を解き明かしうる史料は、きわめてわずかでしかない。おそらくそのためかもしれないが、記念碑や伝説、数々のロマンセおよびイコノグラフィーの存在にもかかわらず、文化史家カルロス・セラーノが最近になって指摘するように、歴史学者たちはマリアナ・ピネーダにどのように対峙すべきか躊躇してきた。多くのスペイン史の概説書のなかでマリアナはしばしば言及されるが、弾圧の「犠牲者」という以外に何ら意味のないお飾りでしかないようだ(4)。

本稿の目的は、マリアナ・ピネーダ像を新たな史料で書き直すのではない。むしろロドリゴによる伝記の最新版を批判的に踏まえながら、歴史のなかのマリアナに接近するとともに、マリアナの政治へのかかわりを探り、その悲劇的な出来事の意味を問うこと。これが筆者の狙いである。この側面については、近年、フェルナンド7世の絶対王政の第二期、すなわち19世紀スペイン自由主義史学が命名した「忌むべき10年間」(1823～33年)に起きた自由主義運動、とくにマリアナがかかわったとされる、30年末から31年のトリーホスの陰謀・蜂起の全貌が明らかにされ(5)、わずかだがマリアナに関するエッセイ風の論考(6)もある。他方で、グラナダ関連の最近の著作(7)からは、マリアナの伝説化に関する知見も得られている。そこで、「自由の殉教者」のため行われた慰霊祭・記念行事や記念碑建立の動きを跡づけ、マリアナ・ピネーダの記憶のゆくえをたどること。これが本稿のもうひとつの狙いである。

## 1 マリアナ・ピネーダとその時代

19世紀20年代末のグラナダは、人口がおよそ6万5千人、市街区には23の教区教会、35の修道院、そのうち女子修道院は19、そのほか郊外に3つの修道院と6つの礼拝堂があった。このように宗教的雰囲気に取り込まれたグラナダは、まさに「聖別された都市」であり、保守的で辺鄙な地方都市であった(8)。とはいえ、グラナダはカトリック両王の時代から高等法院が設置され、18世紀からは軍総督府が置かれて、スペイン南部の司法・軍行政の重要な都市でもある。

### 数奇な運命のもとで

マリアナ・ピネーダは、このグラナダに1804年9月1日に生まれる(9)。父はマリアノ・デ・ピネーダ・ラミーレスといい、インディアス派遣から帰国した退役軍人。海軍大佐であったマリアノは、かつてカラトラバ騎士団員に列せられた由緒ある貴族の家系の出である。母はマリア・デ・ロルドロス・ムニョス。コルドバ地方はルセーナの農家の娘。マリアナが誕生する2年前、父マリア

1820年ころのグラナダ市街



Barrios Rozúa, J. M., *Reforma urbana y destrucción del patrimonio histórico en Granada*, Universidad de Granada, 1998, p. 238.

ノが農地を所有するルセーナを訪れたとき、マリアと知りあう。マリアは夫よりも30歳ほど若い。身分違いの結婚は正式なものではなかった。マリアノにとってマリアは内縁の妻、マリアナは嫡出ではなく庶子である。マリアノは若き妻とマリアナとともに、両親から相続したダーロ通りの邸宅に落ち着く。ダーロ川沿いのこの通りは、真南にアランプラ宮殿の丘を臨み、19世紀30年代まで貴族階級の住宅地区であった。付近にはグラナダの政治社会の中心、ヌエバ広場がある。

マリアナは生まれたときから数奇な運命を背負った。マリアナ誕生の直後、母マリアが健康を損ねた父に代わってマリアナの親権と夫の遺産相続を請求したことから、両親は不仲となって離別し、母は消息を絶った。そして1805年、父マリアノが死去する。父の遺言状によって、マリアナの後



ダー口通りのピネーダ邸  
(17世紀の建物、今日はホテル:筆者撮影)

見人に指名されていたのは、父の実弟で叔父のホセ・デ・ピネーダ・ラミーレスである。当時41歳のホセは、盲目で独身であったのでダー口通りの同じ邸宅に住んでいたが、これを機に親戚筋の女性トマサ・ギラル・イ・サラサルと婚約を交わす。しかし、婚約者トマサが幼児の養育を拒んだため、ホセは子供のいないピネーダ家の知人夫妻、ホセ・デ・メサとウルスラ・デ・ラ・プレサにマリアナの養育を託すことになる。

かつてピネーダ家の使用人だったメサ夫妻は、当時としては洒落た菓子店や乾物店を経営し、市内にいくつかの支店を出していた。マリアナはラス・アニマス通りの養父母の家で手厚い庇護のもと、ウルスラの二人の兄弟と二人の甥たちに囲まれて幼少期を送る。メサ夫妻は、マリアナを由緒ある家系の子女のための<sup>コレヒオ</sup>小学校「ニイニヤス・ノブレス」(「高貴なる女兒」の意)に通わせた。

1813年、店の経営も順調なメサ夫妻は、マリアナの後見人のホセ・デ・ピネーダ邸—マリアナの生家—の隣に転居する。こうして、マリアナは両親のように慕うメサ夫妻らに加え、身近に叔父たちのいる環境に戻るが、ホセは、妻トマサと長女マリアを残して同年5月に死去する。このとき義母の執拗な働きかけで遺言書を作成していたホセは、全財産を妻トマサに残す。その遺産目録のなかには、マリアナが父から相続したはずの財産が含まれていた。これが後にトマサやその娘マリアとの係争の種となり、マリアナを生涯にわたって悩ませることになる。

マリアナ・ピネーダは早熟にして魅力的な女性だったのだろう。1818年、彼女が14歳のときに10歳年上の軍人マヌエル・ペラルタ・イ・ヴァルテと出会う。初恋の相手ペラルタは、グラナダ地方は北東部のウエスカルの貴族の出身である。ロドリゴが述べるように、マリアナが私生児だったからだろうか。サンタ・アナ教会での二人の結婚式は、翌年の10月9日、内輪だけでひっそりと執り行われた。ダー口通りのメサ家で新婚生活に入った二人の間には、20年に長男が誕生し、ホセ・マリア・デ・ペラルタと命名される。ペラルタ夫妻は21年にレコヒーダス通り27番に新居を移し、そこで長女が誕生した。マリアナは敬愛する養母の名を採って、その子にウルスラ・マリアと命名した。翌年にはメサ夫妻も町の中心に近い同じ通りに転居してくる。ところが、幸せなはずの結婚生活に予期せぬ不幸が襲いかかった。22年5月、夫のペラルタが29歳の若さで急死するのだ。このときまだ18歳のマリアナは、グラナダで「もっとも若くて美しい未亡人」として衆目を集めたという。

ロドリゴが述べるように、夫を亡くしたマリアナは、当時の習慣に従って1年間の深い喪に服さねばならない。マリアナは母として、何よりも残された2人の子供の養育の義務を負い、未亡人としてグラナダ流の深い宗教的感情に浸りつつ、亡き夫の名誉を守らねばならない。女性として決して寛容ではない、地方社会に根づく様々な偏見とたたかいながら、慎ましく家に引きこもる生活を貫かねばならない。グラナダでは、旧態依然として古いキリスト教的な価値観と慣習が支配していたからだ(10)。

### マリアナが生きた時代

マリアナ・ピネーダの短い生涯の背景には、スペインを揺るがせた重要な出来事がある。19世紀最初の30年間は、絶対主義と自由主義との苛烈な対立・抗争の時代である。フランス軍侵入を契機に始まる独立戦争(1808～14年)の時期、占領をまぬかれた商業都市カディスで、1810年に国民議会が開催されると、自由主義的改革を通じてアンシャン・レジームが法制度的に廃止された。12年にはスペイン史上初めての近代的憲法、いわゆるカディス憲法が制定されている。

しかし独立戦争が終結する1814年、ナポレオンによってバイヨンヌに幽閉されていたフェルナンド7世が帰国する。同年5月4日の王令によってカディス国民議会の成果が破棄されると、絶対



マリアナのポストカード

主義の反動が続き、多くの自由主義的な代議士や親仏派は、亡命を強いられた。

当時のスペインは、著しく農村的でヨーロッパの文化潮流から半ば孤立し、ブルジョワ的改革を担う近代志向のエリートは、きわめて少数派であった。絶対主義への復歸にさしたる抗議も民衆的反乱も起こらない。むしろ大多数がそれを受け入れたのである(11)。絶対主義の牙城であったグラナダでは、1814年の5月初旬、軍人や聖職者の扇動で軍総督府の守備隊がピブランブラ広場のカディス憲法記念碑を破壊し、5月14日には、「期待される国王」フェルナンド7世の肖像画を掲げた大勢の住民による示威行進が組織され、市街は歓喜と熱狂に包まれた(12)。

しかし、少数精鋭の自由主義者<sup>リベラール</sup>たちの陰謀が始まろうとしていた。それは蜂起という手段を用い

て、国王にカディス憲法の承認あるいは政治改革を迫ることを目標とした。そのために理想的な道具となるのが軍隊である。軍隊、より正確に言えば、傑出した軍人指導者による蜂起は、プロヌンシアミエントと呼ばれる。それは蜂起宣言を合図に、各地の軍駐屯地部隊および秘密結社の同調・支持を求めて権力奪取あるいは政府交代を目指す、絶対王政期に特徴的なロマン主義的反乱形態であった(13)。

蜂起の準備段階で利用されるのが秘密結社である。スペイン南部では、しばしばモンティーホ伯爵の名と結びついて語られるグラナダのフリーメイソン、「グラン・オリエンテ」が重要な役割を果たす。1814年にグラナダ方面軍司令官に任命されたモンティーホ伯爵は、自由主義者を弾圧する側であったが、啓蒙改革派で自由主義に理解のある人物として知られ、同僚のカンポベルデ侯爵とともに秘密結社を再編していた(14)。この秘密結社は、西アンダルシアからムルシア、さらにカタルーニャ地方のジローナまで広がる、地中海沿岸の結社ネットワークの要に位置した。1816年から17年の一連の陰謀、すなわちラシーとミランス・デル・ボッシュのプロヌンシアミエントを後方で支援したのがグラナダの結社である。そのため19年にカンポベルデ侯爵は投獄され、モンティーホ伯爵は軍司令官を罷免されて、サンティアゴ・デ・コンポステーラに追放された(15)。ラシーは、バルセローナで逮捕されたあとマヨルカ島で処刑されるが、このとき彼と行動をとともにして投獄された蜂起軍人のなかにトリーホスがいた。マリアナが10年後に接点をもつ人物である。また数年後、マリアナは幼少期にダーク通りの隣人であったモンティーホ伯爵の知遇を得ることになる。

プロヌンシアミエントは、挫折を繰り返したが、1820年1月のカディスにおけるリエゴのそれは成功した。この20年革命によって「自由主義の3年間」(1820～23年)が訪れると、カディス憲法が復活し、カディス国民議会では着手された自由主義的政策が実行される。22年8月、革命の立役者リエゴがグラナダを来訪すると、盛大に歓迎式典が執り行われ、国歌に制定されたばかりのリエゴ賛歌が合唱された(16)。

しかし、新たな立憲体制は、自由主義者が急進的立場の熱狂派と旧勢力や国王との妥協を受け入れる穏健派に分裂して自壊寸前であった。これに止めを刺すのがウィーン体制のヨーロッパ列強の干渉である。1822年10月のヴェローナ会議で、スペインへの軍事的介入が決定されると、「聖ルイの10万人の息子たち」の名で呼ばれた5万7千のフランス軍が、フェルナンド7世の絶対王政復活のためにスペイン領土内に侵攻し、28年まで駐留するのである。もはや新たな独立戦争は起こらなかった。

絶対王政を復活させた国王は、ただちに軍事委員会を設置して自由主義者の弾圧を開始するとともに、粛清委員会を通じて反体制的な国家役人を罷免した。他方、フランス軍との降伏協定に基づいて、捕虜となった立憲主義派軍人はフランスに連行された。同時に報復を恐れる軍人たち1万2千人以上が、フランスに避難場所を求めた。この1823年の亡命は、それ以前の規模をはるかにし

のいでいる。パリは親仏派貴族、商人、金融業者などの大ブルジョワ、将軍や政治家などのエリートたちの亡命先である。同様に、イギリス領ジブラルタル経由でイギリス本国へ亡命したものもかなりの数にのぼる。24年に千以上のスペイン人家族が定住したロンドン、30年まで亡命者たちの政治的文化的拠点であった(17)。

絶対王政の復活後、グラナダ高等法院では「粛清名簿」が作成され、些細な嫌疑による告発は無数にのぼった。粛清委員会が密告を容易に受け入れ奨励すらしたので、自由主義者に対する報復と脅迫行為が横行した。嫌疑をかけられた人々は、私生活でも職業生活でも脅かされた(18)。しかしこの弾圧下、1820年代半ばのグラナダには「評議会」(19)の名で呼ばれた秘密結社が存在した。このグラナダ評議会は、「自由主義の3年間」のグラナダで立憲主義体制の盾となった司令長官、カンポベルデ侯爵が組織した結社である。主要メンバーのなかには、弁護士でマリアナ・ピネーダの知人アントニオ・デル・カスティージョやフアン・ルミーがいる。前者はマラガやジブラルタルの評議会と絶えず連絡を保ち、後者はトリーホスが結成したロンドン評議会やジブラルタル評議会と連携網を築こうとしていた(20)。

他方、政治犯罪を一掃する目的から、1825年、グラナダ高等法院に宮廷直属の特別法廷が設置された。このとき特別判事に任命されたのが、警察長官も兼ねるラモン・ペドロサである。ここに一人の人物に警察権と司法権が一体化する(21)。のちにマリアナを破滅に追い込むペドロサが着任してまもなく、旧市街のエルピラ門の北に位置する空き地、カンポ・デ・トゥリウンフォでは毎年のように公開処刑が繰り返された。1825年から31年末まで、マリアナを含めて少なくとも30人が処刑台の露と消えている(22)。

## II マリアナに転移する自由主義

ロドリゴの伝記に序文を寄せた近世史の大家、ドミンゲス・オルティスによれば、マリアナ・ピネーダは絶対王政打倒のための陰謀・蜂起に固執し、いたずらに命を賭けた一群の犠牲者に含めることができるが、その明白な篤き宗教心からイデオロギー的にもっともラディカルな党派に属していたわけではない(23)。しかし、副題「絶対主義の暴政に対する革命的女性のたたかい」には、神話化されたマリアナ像が色濃く滲んでいる。はたして、現実のマリアナは、どのように自由主義とかかわるのだろうか。マリアナを取り巻く周辺、とくに人間関係と彼女自身が巻き込まれた出来事のなかにそれを探ってみよう。



## テルトゥリアのマリアナ

夫ペラルタの死から約2年後、すなわち1824年の春先、貴族の血を引く若き未亡人マリアナ・ピネーダは、モンティーホ伯爵夫妻のサロンで催されるテルトゥリアに招かれる。啓蒙改革期に起源をもつテルトゥリアは、個人の家を他人に開放して自由な個々人が会話を楽しむための集いであり、政治的討論の場でもある。モンティーホ伯爵は、23年に流刑の地サンティアゴ・デ・コンポステラから妻を伴ってグラナダに帰還し、グラシア通り一角の大邸宅を新居としていた。当時グラナダでもっとも名声を博した伯爵邸におけるテルトゥリアは、上流階級の社交の場であり、自由主義者たちの集い場でもあった(24)。ここでマリアナは、テルトゥリアの常連だった若き軍人、自由主義者のカシミロ・プロデットと出会う。そして二人は、モンティーホ伯爵夫人ドニャ・マヌエラの仲介で婚約を取り交わした(25)。24年9月、プロデットは結婚許可願いを国王に提出し、同年12月に許可が下りるものの、それには当時の語彙にしたがうと、「身上の純化」という条件が付されていた。身上調査を行う軍事委員会がプロデットの「政治的信条」に疑義をはさみ、最終的に申請を却下したのだ。プロデットは29年に軍職を解かれ、30年にハバナに追放される(26)。

二人の愛の破局後、マリアナは1825年から約2年間グラナダを不在にし、その間の消息は謎のままである。マリアナがグラナダに戻るのは27年である。レコヒーダス通りの養父母の住民台帳にマリアナの名前が出ている。しかしこのとき、娘ウルスラの名は住民台帳に記載されていない。ロドリーゴが推察するように、グラナダを留守にした時期に病死したようだ。

グラナダに戻った1827年、マリアナは初めて検察当局に告発された。マラガの刑務所に収監されていた政治犯ロメロ・テハーダなる人物が、尋問に際してマリアナの名を出し、彼女がイギリス領ジブラルタルに亡命した「アナキスト」たち—早くもこの時期に体制派の人々は自由主義者をこうも呼んだ—の協力者だと供述したという(27)。この情報を受け取ったグラナダ警察当局は、マリアナおよび使用人アントニオ・ブレルに対して陰謀罪の嫌疑で家宅捜索を行なった。ブレルは、かつて士官としてリエゴのプロヌンシアミエンに参加した経歴の持主である。家宅捜査の結果、マリアナの自宅で怪しげな何通かの信書が押収されたが、決定的な証拠品は発見されなかった。マリアナの知人で弁護士ホセ・エスカレーラの尽力もあり、この件の審理は、証拠不十分で中断された(28)。

テハーダなる人物の証言内容は、けして根拠のないものではない。モンティーホ伯爵邸のテルトゥリアの経験のあと、マリアナ・ピネーダは、1824年以来、亡き夫に代わってレコヒーダス通りの自宅をテルトゥリアの場に開放した。客の出入りが頻繁な、養父ホセ・デ・メサが経営する菓子店の奥部屋もテルトゥリアの場であった。グラナダの自由主義者たちは、未亡人マリアナに明晰な知性と毅然たる意志を見せつけられ、彼女に全幅の信頼を寄せていた。事実、マリアナは迫害を受けた自由主義者の避難所として自宅を提供し、国内外の秘密結社員の連絡のための仲介役を引き受け

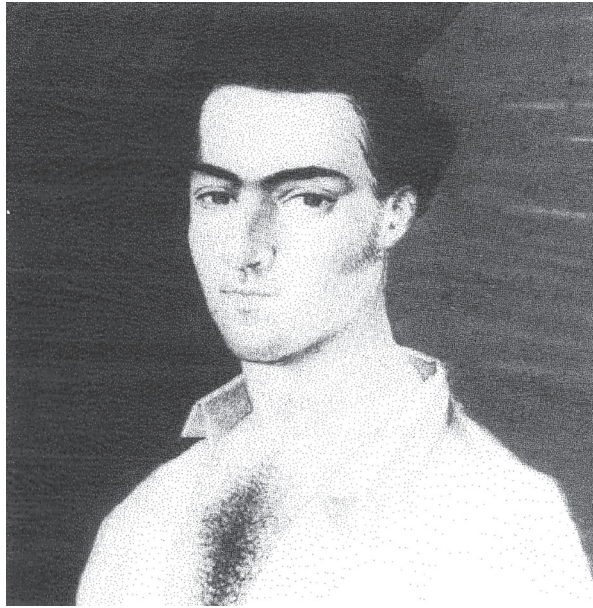
た。「アンダルシア全域に広がりをもつ自由主義者たちの目に見えない網目の中、レコヒーダス通りで活動家たちはひそかに支援を得られた」のだ(29)。

1829年から30年のころ、グラナダ大学法学部の学生だった若き日のホセ・デ・サラマンカも、反政府運動に情熱を傾け、マリアナの自宅で開かれたテルトゥリアに参加したことがある。10数年後に金融業によって大富豪にのし上がり、大蔵大臣になった人物である。同時代の観察者、メソネロ・ロマノネス伯爵が著した彼の伝記によれば、マラガ出身の青年サラマンカは「類まれな美貌と知性をそなえた急進的思想の女性に狂ったように恋に落ちた。自由の殉教者のなかでもひとときわ際立つこの女性は、おそらく自らが抱く革命への熱情で若い学生を虜にした」(30)という。明らかに、神話化されたマリアナ像には誇張が入り混じっているが、マリアナが担っただろう勧誘活動の一面を見てとれよう。

もちろん、マリアナ・ピネーダは、秘密結社、具体的にはグラナダ評議会のメンバーではない。19世紀のこの時代、女性はこの種の結社員になれなかった。だがカステルスが評するように、マリアナはまぎれもなく「女性陰謀家」のシンボリック的存在である。ただし、「自由・平等という自由主義の原理の防衛に参加した女性たちの氷山の一角」にすぎなかった。バレンシア地方のペニスコラ、カルタヘーナ、アルヘシラスに女性陰謀家が存在したし、なかでも「自由主義の3年間」に内務大臣であったサルバドル・マンサナレスの未亡人メルセデス・デ・ギリェマン、マラガの法律家カルロス・アクシーノの妻にしてトリーホスとの通信役であるマリア・テレサ・エリオットは、もっとも活動的な女性として知られる(31)。

こうした女性たちの存在は、いわば時代の所産であったと考えられる。なぜなら、自由主義者の活動拠点は、基本的に秘密結社やカフェであったが、いかなる集会も禁じられた厳しい弾圧下において、個人の家で催されるテルトゥリアも重要な役割を果たしたからである。政治信条・思想を共有する人々に開かれるテルトゥリアの場、すなわち本来的に私的領域である家は、いわば準公的なソシアビリテ空間へと変容し、必然的に女性、とくに既婚女性がしばしば歓待役として介在したのだ(32)。

マリアナは、明らかに自由主義者であるがゆえに、また自由の大義を擁護したがゆえに死を強いられることになる。とはいえ、セルヒオ・イノホーサが指摘するように、マリアナは自ら自由主義を説いたわけでもなければ、その主体的な行為者でもなく、むしろ自由主義的雰囲気、すなわちマリアナを取り巻く人々が織りなす親密な環境のなかで、自由主義が求めるものを自分自身の考えに取り込んだのである。さらに、イノホーサの洞察によれば、マリアナの自由主義への傾斜は、その生い立ちと深く関係している。母マリアとの親子関係は合法化されることはなかった。父も認めたように、マリアナは私生児である。この出生の秘密から、自分自身を他者に承認させたいとの熱情と欲求が意識の内面でたえず抱かれ、マリアナは女性に禁制の公的領域、すなわち自由主義の世界



フェルナンド・アルバレス・デ・ソトマヨル  
Rodrigo, A., *Mariana Pineda*, Madrid, 2005. より

へと踏み出したという(33)。

マリアナに自由主義が転移する契機となるのが、男性たちとの愛である。マリアナの人生で決定的な出来事は、いつでも愛と結びついていた。それなしには何も起きなかったかのような印象すら受ける。事実、彼女の周囲には夫のペラルタをはじめ、恋人のプロデット、そして叔父のペドロ・ガルシア・デ・セラノ、従兄弟のフェルナンド・アルバレス・デ・ソトマヨルがいた。マリアナが思想的に感化を受けたとされる4人の男性である。

### 監視されるマリアナ

1828年当時、親戚の二人は、グラナダ大聖堂の北側にある監獄、カルセル・バッホに収監されていた。亡き夫ペラルタとは従兄弟である叔父のペドロ・ガルシアは、ウエスカル出身の「熱狂的な立憲主義派」の司祭である。マリアナは獄中の孤独な叔父をしばしば訪れる。ガルシアは同年2月末に釈放されると、ウエスカルに戻って司祭職に復帰し、その後もマリアナの良き相談相手だったという。とりわけ思想的に大きな影響を与えたのがこのペドロ・ガルシアである(34)。

従兄弟のソトマヨルは、1795年にマリアナの父と同じルセーナの貴族の家系に生まれる。1813年にサン・フェルナンド士官学校に入学し、独立戦争期に少佐となる。彼はリエゴのプロノンシエミエントに参加し、「自由主義の3年間」の時期、サン・フェルナンド基地の国民兵隊が発行して

いた新聞『愛国主義のガセータ』にカディス憲法と人権に関する意見を寄せている。23年にナバラでのフランス軍との戦闘に敗れて捕虜となるが、翌年フランスから帰国すると、家族とともに一時期サンタンデルに定住した。ソトマヨルは、独立戦争の英雄、エスポス・イ・ミナが結成していたバイヨヌ評議会とつながりを持ち、27年3月に陰謀計画に関与した嫌疑でコルドバ地方のカブラで逮捕され、死刑判決を受けていた(35)。二人の親戚との面会が許可されたマリアナは、陰謀罪で投獄されていたその他の政治犯とも接触し、彼らと外部世界とのつなぎ目に位置していた。事実、ソトマヨルはマリアナを介してグラナダ評議会とも連携していた(36)。

ところで、1828年に養父ホセ・デ・メサが死去すると、マリアナは経済的に独立しなければならなかった。マリアナはメサ夫妻の家を出て、アギラ通り6番に転居する。戸主マリアナの家には、息子のホセ、二人の女性使用人、それにもう一人の使用人ブレルが住んでいた。そして同年10月、彼女の運命を決定づける出来事が起きる。マリアナはソトマヨルの脱獄を手助けし、自宅に匿ったのだ。

ソトマヨルの脱獄事件は、10月26日のことである。計画は周到に準備された。死刑執行を控えた囚人が監獄内の礼拝堂に入る日には、多くの修道士や聖職者が訪れる。あらかじめ監獄内の構造を把握したマリアナは、使用人ブレルとともに、毎日のようにソトマヨルに面会して差し入れを行った。カプチーノ会修道士が着用するマントのような修道服、ロザリオ、飾り紐、変装用の髭や帽子を次々と運び入れる。決行当日、修道士に変装したソトマヨルは、牢獄内の警備が手薄になる時を見計らい、夜の暗がりのなか修道士の一行にまぎれて脱出に成功した(37)。彼の脱獄は、グラナダの町で大反響を引き起こした。当然、マリアナの関与を疑った判事ベドロサは、ただちに家宅搜索を行ったが、ソトマヨルはすでに逃亡した後である。以来、彼女への監視が一段と強まった。

監視にさらされるマリアナには秘密があった。実はこのとき、マリアナは懐妊していた。ソトマヨルの脱獄から約2ヵ月後、1829年1月8日に女児を出産する。その日の夜、ひそかに一組の男女がエルピラ通りの孤児院を訪れて、ルイサと命名された女児を預けた。ルイサは孤児院で洗礼を受けたが、2週間後、体調が回復したマリアナ自身が孤児院を訪れ、公証人モンティハーノの立会いで、自分の子ルイサ・ピネダ・ムニョスを認知した。そのときマリアナは、娘ルイサの養育をある夫婦に託した。マリアナにとって第3子ルイサの誕生は、限られた人々だけの秘密であった。もし露見すれば、由々しき醜聞になったであろう。ルイサの父親はホセ・ベニャ・イ・アグアヨという。弁護士でグラナダ文民当局の法律顧問であった彼は、約10年後にルイサを認知する。マリアナを愛した彼は、マリアナの最初の伝記作者でもある(38)。

さて、執拗な監視に不安を抱くようになったマリアナは、1830年7月、高等法院の訴訟代理人2名を弁護士に任命し、自らが抱える問題を解決しなければならなかった。ひとつは、陰謀罪や逃亡幫助の嫌疑をかけられたマリアナ自身と養母ウルスラ、使用人ブレル、同じく使用人のマリア・ラ

モンとカルメン・サンチェスの5人、そしてそのほかに共謀の嫌疑をかけられた4人の弁護のためである。この4人とは、頻繁にマリアナの家を訪れていた人々で、弁護士でグラナダ評議会のアントニオ・デル・カスティーリョ、医師のアントニオ・マリア・デル・ピノ、自由主義者アントニオ・ボルハ、公証人のフランシスコ・オルティスである(39)。マリアナには法律関係の知人が多くいる。というのは、父マリアノ・ピネーダ・ラミーレスが残した遺産相続をめぐる、叔父ホセの妻、トマサ・ギラルとの訴訟が1820年から続いていたからだ。これが二人の弁護士を立てたもうひとつの理由である。ちなみに、マリアナは人生の最後の瞬間まで、父から受け継いだ財産と家門を長男ホセに継承させたいとの切なる願いを抱いていた。遺産相続に関する訴訟関連の文書は、1820年、28年、29年、30年のものが残されている。

### 蜂起のユートピア

ウィーン体制のヨーロッパでは、1830年にフランスで7月革命が勃発した。ブルボン家の正統なる国王シャルル10世の廃位後、オルレアン家のルイ・フィリップ「市民王」による自由主義的な立憲君主制が成立すると、スペイン人亡命者たちの間に期待感が一挙に膨らむ。30年の秋から翌年まで、フェルナンド7世の絶対王政打倒を目指す一連の蜂起が解き放された。カステルスが命名する「蜂起のユートピア」である(40)。

革命運動の主要拠点は三つあった。ロンドンに亡命していたトリーホス(41)らが評議会を移したジブラルタル。フランスに亡命中のエスポス・イ・ミナが評議会を結成していたバイヨヌ。国内ではマルコ＝アルツやサルスティノ・デ・オロサガを指導者とする「至高の中央評議会」が存在するマドリード。この評議会は、バイヨヌとの連携を維持していた。1830年秋から31年に展開する一連の蜂起は、まずバイヨヌ評議会が30年秋に決行したピレーネ遠征作戦に始まる。いくどかの遠征作戦は、アラゴン地方の王党派義勇軍に阻まれて挫折し、スペイン南部に期待が寄せられるようになる。

トリーホスのジブラルタル評議会は、1831年初頭に南部沿岸から上陸作戦を決行すべく、フランスの自由主義者で銀行家のラファイエットから資金援助を得て、スクーター一隻と船舶2隻を調達し、同時にアンダルシアの密輸業者や山賊の支援も取りつけることに成功していた。カディス、マラガ、グラナダなどの評議会の支援と連携、そしてミナらのグループの協力も期待された。トリーホス自身は、マラガ地方長官で軍駐屯部隊の司令官ゴンサレス・モレーノ將軍と接触を試み支援の約束を引き出していた。リエゴのプロヌンシアミエントをモデルに、アンダルシアに分散する拠点で計画された広範な蜂起は、1831年1月にカディス地方のラ・リネアに始まり、2月から3月初旬にカディスおよび近郊諸都市で組織される。ジブラルタル郊外からマラガ地方のロンダ山間部にまで拡大した蜂起の波は、独立戦争の英雄マンサナーレス將軍の支持を受けて勢いづき、再度カディ



トリーホスと仲間たちの処刑 —アントニオ・ギスベルト（1860年制作）—  
*Sagasta y el liberalismo español*, Madrid, 2000. より

スからサン・フェルナンド、ベハルへと波及した。マンサナーレスはマラガ方面へと進行したが、政府軍に阻まれて敗退した。トリーホスは2月28日に200人の兵士とともにアルヘシラス近郊のアグアダに上陸する。しかし、王党派義勇軍に遭遇して退却を余儀なくされた。その結果、トリーホスらは一斉蜂起の中断を余儀なくされた。マリアナがグラナダで逮捕されるのは、それからおよそ2週間後のことである。

蜂起は各地でことごとく挫折し、参加した兵士たちは次々と処刑された。トリーホスは、自由主義者たちと接触を保ちながら、1831年10月、再度フエンヒローラ近くに上陸してマラガへと向かう。だが彼は、モレーノ將軍の裏切りに合い、マラガ市近郊のアラウリン・デ・ラ・トーレにおびき出されて逮捕されると、同年12月、マラガの浜辺で49名の仲間とともに処刑された。彼らのなかには、15歳の見習い水夫の少年もいた。

カステルスが詳細な実証研究で明らかにしたように、トリーホスらの蜂起に際しては、スペイン各地の秘密結社による陰謀のネットワーク、組織的な準備と広範な連携が存在した。しかし、結末

は惨憺たるものであった。亡命グループが国内の秘密結社の支援を過大評価したのは否めない。だが、それ以上に無視できないのは、フランスの7月革命直後、スペイン政府がとった厳戒態勢である。法務大臣カロマルデは、テロル政策を打ち出す一方で、警察による諜報活動を通じて秘密結社のネットワークを分断し、未然に蜂起計画の芽を摘み取ることができた。事実、1831年3月、カロマルデはマドリードの評議会を解体させた。スペイン南部では判事ペドロサが、ジブラルタルやマラガの結社活動に関する情報を逐次収集し、地中海沿岸部への上陸作戦を危惧して警戒態勢をしていたのだ。ファン・ルミーには、ペドロサが送り込んだ秘密警察がつけられていた(42)。

フェルナンド7世の絶対王政の第2期には、政府と穏健的ブルジョワジーとの「協定」が模索された時期である。この協定は、国王にとってアンシャン・レジームの危機と王位継承問題とからむカルリスタの危機を克服するために不可避であった。したがって、この政治的枠組のもとでは、協定以外のいかなるオルタナティブも、経験的に蜂起というユートピア的形態とならざるを得ない。同時代のロマン主義に触発され、大胆さとヒロイズムに溢れる直接行動には、明らかに「専制」と「暴政の悪弊」から「祖国を人民の名において救済する」という強い意志が読みとれる。自由主義の陰謀と蜂起は、挫折したが、絶対主義を弱体化させ、自由主義革命をもはや引き延ばすことを不可能にしたのである(43)。

### III 歴史のマリアナから伝説のマリアナへ

1831年2月末のグラナダに戻ろう。トリーホスらがアグアダ上陸に失敗し、蜂起計画が中断されたときである。このときジブラルタルからカディス、さらにマラガ近辺にまで波及した一連の蜂起の知らせが伝わると、見かけは平穏を保ったグラナダでは、緊張が一気に高まっていた。判事ペドロサは、マリアナに対する陰謀罪の訴追を30年に再開し、いく人かの危険人物をグラナダから追放していた(44)。

#### 沈黙の抵抗

前年の秋、南スペインでの蜂起計画が練られたとき、マリアナはひそかに旗の制作に取りかかった。しかし1831年3月初旬、マリアナはその作業をひとまず中断させた。完成間近の旗は、マリアナが制作を依頼したアルバイシン地区に住む二人の刺繍職人の仕事場にあった。判事ペドロサは、ある密告を通じて旗の存在に関する情報を伝え聞くと、すぐさま現場に馳せつけ、女性たちを買収し、マリアナのもとにそれを返却させた。アギラ通り6番のマリアナの自宅に警察が踏み込んだのは、3月18日のことである。

押収された旗というのは、中央に緑色の三角形の布地が縫い付けられた、ほぼ正方形の紫色の絹地のタフタンと13の文字の型紙である。この型紙の文字を組み合わせれば、三角形の三辺にそれぞれ「自由」「平等」「法」の刺繍文字が入ると推定され、それは色柄からも明らかにフリーメイソンの旗と断定された。これこそが判事ペドロサが捜し求めたものであり、南スペインで計画された一斉蜂起に呼応してグラナダの自由主義者たちが掲げるはずの旗だとされた(44)。

家宅捜査が行われた日、陰謀罪でマリアナに逮捕状が出されたが、精神的不調を訴えたマリアナは、医師の証明書のおかげで自宅軟禁に置かれた。しかし同日、夫の死後マリアナの家に移り住んでいた養母ウルスラ、使用人ブレルも陰謀罪で逮捕された。数日後、マリアナは老婆に変装して逃亡を企てたが、自宅から外に出たところで警備員に捕らえた。このことがあって、マリアナは3月26日、女子修道院サンタ・マリア・エヒプシアカに身柄を移された。同修道院は、「自由主義の3年間に制定された永代所有財産解放令、すなわち修道院・教会の土地財産売却を定めた法令が適用されていたが、未売却のままであり、近世以来、売春婦の更生および女性犯罪者の収監に利用されていた(45)。マリアナは2ヵ月間、ここに収監されて取調べを受けるのである。

判事ペドロサは、法務大臣カロマルデからこの事件に関する全権を委任されていた。おそらく司法当局の狙いは、マリアナ逮捕を契機に、蜂起計画の首謀者たちの氏名や陰謀に関する情報を得ることであった。そのため、ペドロサはマリアナに仲間の姓名を白状することを条件に、恩赦を申請すると約束した。女子修道院サンタ・マリア・エヒプシアカを頻繁に訪れたペドロサは、マリアナに供述を迫る。そして彼に関するある噂が流れた。マリアナの美しさに魅了されたペドロサは、マリアナに求愛したが、冷淡に断られたため、嫉妬から復讐心かられたというのだ。このことは、後日、民衆のロマンセにも語り継がれている。ただし、それが裁判の直前に流れた噂であったことは注目されてよいだろう。マリアナの弁護人ホセ・エスカレーラが裁



マリアナ・ピネータと「自由」の旗(国立図書館)  
Rodrigo, A., *op.cit.* より



判の弁護人陳述のなかで、あえてこの噂に言及しているからである(46)。

他方、神父フアン・デ・イノホーサらは、マリアナに赦免を受け入れるようにと繰り返し助言した。しかしマリアナは、仲間たちへの忠誠と愛から、それが「卑しき行為」だとして毅然として拒んだのだ。数あるロマンセのなかで語り継がれるように、「私が白状すれば、私たちの多くが死んでしまう。私が白状しなければ、死ぬのは私だけ」(47)。こう覚悟を決めていたのだろう。マリアナは最後まで沈黙を貫き通した。これより少し前、ジブラルタルのスペイン領事の報告によれば、アルパレス・デ・ソトマヨルは、従姉妹の逮捕の知らせに接し、国王にマリアナの恩赦を求める嘆願書を送った。マリアナの恩赦を条件に、彼はトリーホスらの陰謀計画に関する秘密情報を当局に提供すると申し出たのである(48)。もちろん、これは無視された。

ペドローサが主導する裁判は、非公開のまま行われ、関係者の召喚もなければ、傍聴も許可されなかった。1831年4月12日から始まる裁判の詳細は不明であるが、ロドリゴが用いる裁判関係史料の断片から、マリアナ裁判が、いかに異常で不正なものかは明らかである。裁判にかかわる検事や判事たちは、当然のことながら、体制派の人間である。そのなかにアンドレス・オイェルという老検事長がいた。ロドリゴによれば、彼は長年にわたってマリアナとは懇意な間柄であり、同僚の検事や判事たちから常々「自由主義者」の疑いをかけられていた。彼に向けられた敵意、あるいはペドローサの圧力に屈したのか、オイェルはマリアナに死刑を求めた。ペドローサがオイェルの検事職と退職後の年金の保証を示唆したという(49)。不当な裁判については、のちに進歩派のパスカル・マドースが19世紀40年代に編纂する『辞典』のなかで、マリアナ・ピネーダ記念碑に言及して次のような記述を残している。「下劣な政治的情熱と犯罪的な復讐心に突き動かされた判事たちは、高名なるドニャ・マリアナ・ピネーダを犠牲にした」(50)と。

ところで、マリアナの弁護人ホセ・エスカレーラは、家宅捜索で発見された押収物の性格を明らかにすることで、マリアナの無罪あるいは刑罰の軽減を勝ち取ろうとする。彼の陳述によれば、件の旗は、19世紀初頭からスペインに存在したフリーメイソンの会所が用いた単なる「飾り」であって、検察当局が糾弾するような「革命的性格の旗」でありえない。エスカレーラは、フリーメイソンの活動と「革命的」活動を切り離し、マリアナの無罪を立証しようと腐心した(51)。エスカレーラの陳述内容は、ある意味で同時代の現実を客観的に踏まえた上での弁護であったが、フランスの7月革命直後の特殊な状況のもとでは、フリーメイソンであれコムネーロであれ、当局にとっては「革命的分子」に他ならない。事実、マリアナはフリーメイソン系のグラナダ評議会のある人々とのつながりを持ち、同時に彼らはアンダルシア全域で一斉蜂起を企図する自由主義の陰謀とかかわっていた。マリアナも同様である。マリアナの使用人ブレルは、ロドリゴが述べるように、「街頭に繰り出すために10人ほどの男たちを待機させていた」(52)。もちろん、司法当局はマリアナの政治への関与を完全につかんでいただけではない。

それにしても、マリアナの罪状が結審するまで、グラナダの軍当局・文民当局はもちろん、マリアナ自身も極刑の判決を予測していなかった。マリアナの行動は、せいぜい秘密結社の「非合法活動への関与」による「共謀罪」であって、禁固刑に値するとしても、けして死罪に値するものではない(53)。だが、彼女の罪状は、1829年の新刑法に基づき、30年10月1日の王勅が定める極刑に値する「国家の安全と正統なる王座の諸権利に対する陰謀」とされ、押収された「革命の旗」こそが「国家に対する反逆」の証とされたのである(54)。法務大臣カルロマデは、ペドロサから送られた審理調書と判決文を受領し判決文に署名し、最後に国王フェルナンド7世が、死刑執行の裁可を下した。

### 強いられる死

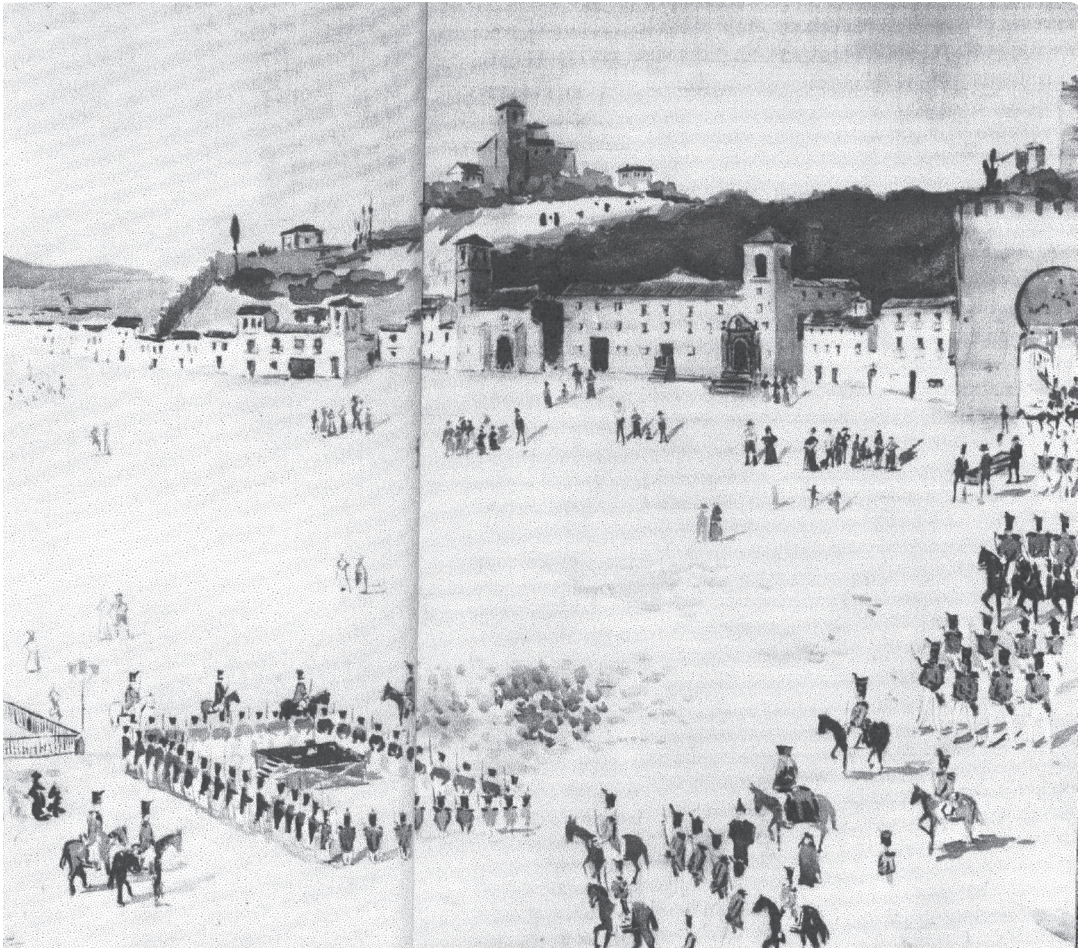
処刑の日が決定された5月半ば、死刑囚の世話や遺体の埋葬を行う「慈悲の兄弟団」が、最後の食事や嗜好品をはじめミサの経費をまかなうために通りに出て、人々に浄財を訴えた。人々はマリアナの処刑が間近なことを知るのだ。このころ、グラナダではひそかにマリアナ救出計画が練られていた。この情報を察知した検察当局は、不測の事態にそなえて、軍総督府に治安維持のために、処刑当日に軍隊を出動させるように協力を求める。親自由主義派の司令長官のコンデ伯爵は、この要請に難色を示して、諸部隊に兵營に待機するように命令しただけである。司令長官は、「人民」が街頭に繰り出してマリアナ救出を決行する際には、協力する用意があったという(55)。しかし、検察当局の要請を受けて、グラナダ近郊のサンタ・フェから王党派義勇軍の騎馬隊など、増援部隊がグラナダに到着し、処刑の前々日から嚴重な嚴戒態勢がとられていた。

5月24日の朝、マリアナの身柄は監獄カルセル・バッハに移送されていた。独房に入れられた死刑囚には、最後の3日間だけ好きなものが与えられる。マリアナはこの牢獄に移送されて以来、食事は何も摂らずにオレンジだけを食した。翌日の朝、死刑囚は午前中に聖体拝領を行うのが習慣になっていたので、マリアナも礼拝堂で最後の秘蹟を受ける。25日の午後、マリアナは、かつて洗礼を施してくれたファン・デ・イノホーサ神父および教区教会のホセ・ガルソン神父とともに残された時間を祈りに当てた。

1831年5月26日の朝、監獄前から刑執行に先立つ儀式が始まる。両の手を縛られたマリアナ・ピネーダは、騾馬に乗せられる。処刑場までの行列の先頭には触れ回り、次に騎馬隊、修道女と聖職者の一行に付き添われた騾馬上の罪人、しんがりに歩兵隊が続く。市街を進む行列は、いく度か歩をとめ、触れ回りが判決内容を読み上げる。「われらが父なる国王陛下の政府に対する反逆罪によって、この女に対してガローテによる死罪および財産没収が言い渡された」(56)。アルバイシン地区からエルピラ通りに通じるいくつかの通りの入口には、遠くからマリアナを見送る女性たちの一団がいた。行列が進む通りには、見物人の姿は見られない。家々の窓と玄関は堅く閉ざされていた。

行列がエルピラ門の北の空き地、カンポ・デ・トゥリウンフォに到着すると、待機していた軍楽隊が太鼓を連打する。マリアナが神父ガルソンに支えられて処刑台に上ると、最後に、触れ回りがあらためて判決内容を読み上げる。神父ガルソンは、神の許しを懇願するマリアナを許す。死刑執行人がマリアナの首に鉄環をつけた (57)。

同時代の証言は、この日のグラナダの町を次のように描写している。「空は雲で覆われていた。嵐のような雲が町の上空を疾走し、衝突する風は凄まじい唸りを上げ、はるか遠くでは雷鳴が轟いていた。街は人影もまばらで、たまに通りを歩く行人の姿があったが、その表情は悲しみと驚きで満ちていた。自由主義者、絶対主義者、多感な娘、疲れた老人、放埒な若者、教養のある者、無学な者、すべて、すべての者たちが苦悩と怒りを表していた」 (58)。数日後、政府の公式発表が『ガ



処刑場のスケッチ  
Rodrigo, A., *op.cit.* より

セタ・デ・マドリード』に報じられた。「この5月26日グラナダにて同市の住民ドニャ・マリアナ・ピネーダが処刑された。さる3月13日に警察が自宅捜査を行い、織りかけの革命的旗および同類の品物が発見された。半島は現在完全に平和を保っている」(59)。

同時代の人々は、マリアナの悲劇を女性の政治的自由にかかわる出来事としてではなく、末期的危機に瀕した権力の横暴として体験した(60)。それはカルロマデによる自由主義者への弾圧が、軍人たちの陰謀活動のためというよりも、シンボリックな事柄ゆえに市民にまで及んだ残忍なる処罰の見本である(61)。マドリードでは本屋のミヤールが「革命分子ゆえに」処刑されている。見せしめの意味が込められているのは明らかである。しかし、マリアナは女性である。彼女の処刑から約1ヵ月後、政府は『ガセタ・デ・マドリード』で次のように処刑を正当化した。「こうした刑罰は、男性よりも女性にとってより大きな苦痛を与えようとも、革命家たちが狂気じみた企ての道具や盾として、無防備で他人に同情を寄せやすい女性を利用するという行動をとったからには、これに対しては厳罰をもって処するために必要であったことに変わりはない」(62)。女性を主体として公の事柄から完全に排除したアンシャン・レジーム期のスペイン社会において、女性陰謀家は絶対主義者にとって自由主義者の道具にすぎないが、政治的に危険な存在と見なされ、偏狂的な政治権力の新たな標的となったのである。

## 内なる反乱

マリアナ・ピネーダは、1830年秋から翌年にわたって起きた革命運動において、けして指導者ではないし、いわんやトリーホスと同格の首謀者でもない。むしろ、付属的、周辺的な役割を担ったにすぎない。そうであるから、カルロ・セラノが指摘するように、マリアナはグラナダの自由主義者の間で知られてはいたが、傑出した指導者の一人、たとえば、エスポス・イ・ミナの『覚書』にも、その妻の『備忘録』にもマリアナの名前は出ていない(63)。おそらく、トリーホスがマリアナの存在を初めて知るのには、彼女の処刑の後のことである。グラナダ出身のルミーは、1831年9月末にトリーホスに宛てた書簡のなかで、マリアナの悲劇に言及している(64)。こうした側面と関連して、セラノは、女性史あるいはジェンダー論の視点からマリアナに接近し、ある意味で歴史上のマリアナを矮小化し、さらに特殊化している。以下、彼の議論をみてみよう。

マリアナのあらゆる行為は、伝統的に女性に固有の行動領域、すなわち家という閉ざされた小宇宙—家族、何人かの主役男性との愛情関係—に限定されて展開する。その短くも波乱の生涯の大半は、家のなかで女性のなすべき仕事とともにあった。女性は何らかの主体性を発揮しうる唯一の社会的領域は、愛の領域であり、そのなかで魅力的なマリアナは、男たちを誘惑し、また誘惑される。それは、彼女が生きた現実においても、のちに伝説が付与する想像のなかでも確認される。愛という負荷は、マリアナの人生とともにあり、女性を私的領域に閉じ込める当時の社会規範に合致して

いる。陰謀活動においても、マリアナは女性として副次的な役割、すなわち自由主義者である男性を支援し、革命の一声を合図に、街頭にくり出す男性たちのために旗を織るのだ。最後まで女性である(65)。

とはいえ、マリアナは、私的領域と公的領域という二項式の枠を逸脱し、本来的に公的領域とされる政治に介入する、きわめて特殊なケースであるという。大胆さと勇気、強い意志と沈黙の抵など、男性的とされる価値がマリアナにそなわっていた。マリアナには、男女の役割分担の伝統的区分に当てはまらない、アンピバレントな面が存在するというのだ。セラーノにとって、マリアナの意義は、彼女が犯した実際の行為、すなわち、その目に見える行動よりも、社会が女性に求める規範への「内なる反乱」にあるという。

セラーノが語る「目に見えない、内なる反乱」は、彼自身が引用するガルシア・ロルカのマリアナ像にかさなる。ロルカは、マリアナ・ピネーダの悲劇を純粋な芸術作品に仕立てた。その作品のなかでは、フェルナンド・デ・ソトマヨルが愛人に設定されており、マリアナに男女の性別役割に関する規範上の領域侵犯を強ひさせる。この違反行為は、唯一最後の瞬間、マリアナが内なる世界一家あるいは修道院一から外部世界に「現れ」るときに決着をみる。しかし、それは最大級の制裁、すなわち、死を意味した。マリアナは女性として愛のために愛に身をささげ、他方で男たちは自由にとりつかれていた。ロルカが述べるように、「最後には、マリアナは恋人が自由をもって彼女を裏切ったとわかったから、自由の象徴へと転化する」(66)。

カルロ・セラーノのマリアナ像はロルカのそれと共通し、歴史上のマリアナからも導き出されるかもしれない。しかしながら、ジェンダー論からの視点は、ややもすれば、超歴史的な図式、つまり公的領域・男性—私的領域・女性の二項式に歴史上の女性をはめこむことにならないだろうか。筆者は、マリアナを彼女が生きた歴史のなかで、見える範囲内でその行動を追ってきた。女性陰謀家としてのマリアナ、テルトゥリアというソシアビリテ空間で行動するマリアナである。付言すれば、マリアナには凋落をたどる貴族家門の運命を見てとれる。マリアナは、もちろん、自由主義の時代に描かれることになる「家庭の天使」でもない。

マリアナ・ピネーダが女性陰謀家のなかでも際立って特殊な存在だとすれば、セラーノが指摘するように、強いられた死が加重事由として利用されたからである。

#### IV 伝説化と記憶のゆくえ

フェルナンド7世の死去によって絶対主義が1833年に終焉すると、穏健派自由主義と国王の妥協で、翌年に王国組織法が公布され、スペインは、王妃マリア・クリスティーナの摂政のもと、娘

のイサベル2世の立憲君主制へ移行する。これより7年間、北部を舞台にカルリスタ戦争が続くなかで、かつて熱狂派と呼ばれた進歩派が政権を奪取すると、絶対王政の犠牲者を顕彰する慰霊祭や記念碑建立が実施される。左派自由主義が自由の殉教者を取り込むのである。それには集合的政治アイデンティティの形成、新しい秩序の正統化、それにふさわしい価値観の普及という意図があった(67)。

### 自由の殉教者の慰霊祭と石碑

1836年、マリアナ・ピネーダ没後5周年を迎えたグラナダでは、住民代表議員マリアノ・グランハが「自由の殉教者」マリアナを記念して「愛国主義的・宗教的」儀式の挙行を提案する。「われわれが目撃した残虐非道な出来事」については、「正義と償いの原理を遂行するため」に「贖罪が求められる」からである(68)。

1836年5月13日、グラナダ市議会は、当時「立憲主義的自治体」と呼ばれたが、このグランハの提案を受けて、厳かにマリアナの葬儀を執り行うことを決定し、ただちに葬儀実行委員会を任命する。同委員会は、17日にベイロ河付近のアルメンゴル共同墓地に埋葬されていたマリアナ・ピネーダの遺体を掘り出して丁重に棺に納めると、ひとまず近くの小集落に安置した。本葬儀の前々日の5月24日、市の秘書官にして国民兵隊第三大隊指揮官の記録によれば、墓地近くの小集落から出発した葬列は、国民兵隊騎兵中隊と警吏の団を先頭に、霊柩馬車、葬儀実行委員を乗せた四輪馬車、最後に砲兵隊・騎馬部隊が続き、カンボ・デ・トゥリウンフォに出て、サン・イデルフォンソ教会への坂を上る。それは、まるで十字架の道の再現を想起させた。教区司祭と聖職者の団、国民兵隊第三大隊、楽器に喪章をつけた第一大隊の軍楽隊が迎えるなか、棺は教会の中に運びこまれる。市長や実行委員会の面々は、四輪馬車から降りると、めいめいが花輪をたずさえて主祭壇前に置かれた棺の上にそれを捧げる。最後に、マリアナの棺には金の玉房がちりばめられた黒の帯が掛けられた(69)。

5月25日の朝、市内のすべての教会が、葬儀を予告する鐘を打ち鳴らす。マリアナの棺は、サン・イデルフォンソ教会で葬儀実行委員に引き渡される。葬列はカンボ・デ・トゥリウンフォに出て、エルピラ門から同名の通りを経てカルセル通りを進み、大聖堂正面入口にたどり着く。主任司祭がマリアナの棺を迎え入れる。実行委員会の面々は、グラナダの聖なる教会に棺を運び入れ、敬愛すべきグラナダの守護聖母像の傍らに準備された棺台にのせた。群集で埋め尽くされた大聖堂で、主任司祭の祈りがしばし続いた。その記憶を称えるべく最大級の名誉が付与されるマリアナは、この瞬間にもグラナダの聖人に列せられたかのような印象を与えた。カトリック教会がマリアナを占有するのである(70)。こうして「自由の殉教者」に、もうひとつの新たな意味が付与される。宗教的忠誠心とキリスト教的敬虔の体現者としてのマリアナである。

5月26日、大聖堂で本葬儀が厳粛に執り行われたあと、マリアナの棺は、葬儀実行委員を先頭に司令長官、県令、市議会議員団からなる長い葬列を従え、ヌエストラ・セニョーラ・デ・ラス・アングスティア教会に運ばれ、そこで棺は市長から主任司祭ホセ・ガルソンに託され、同教会に安置された(71)。

マリアナに添えられる宗教的性格は、必ずしも自由主義と矛盾しない。進歩派自由主義は、19世紀30年代から40年代初頭まで、好んでキリスト教と一体化していた。「イエス・キリストの教えとわれわれの教義とは同じものである」とホアキン・マリア・ロペスが述べた(72)ように、進歩派は、フェルナンド7世の絶対王政下の弾圧の犠牲者たちを、イエス・キリストの使徒たちや初期キリスト教の殉教者にたとえ、自らもその継承者を自任していた。かつてトリーホスやミナと



十字架の慰霊塔(処刑場跡)  
Rodrigo, A., *op.cit.* より

ともに闘ったサルスティエーノ・オロサガは「われわれは、キリスト教がその苦難の時代に差し出したものを人民に提示したのである」と国会演説で熱く述べている(73)。下院議事堂の壁には犠牲者たちの名が刻まれた。

もちろん、カトリック教会と進歩派自由主義は異なる意図をもっていましたが、マリアナの慰霊祭には両者のイデオロギーが矛盾なく入り混じっていた。この側面は、1840年5月26日にカンポ・デ・トゥリウンフォに建立された慰霊碑「十字架」にも見てとれる。1836年の永代所有財産解放令<sup>デサモルティサシオン</sup>に基づいて設置された建造物譲渡委員会は、カンポ・デ・トゥリウンフォに面するカプチーノ修道院正面にあった大理石円柱、鉄柱頭および鉄製の十字架を撤去し、これらを譲り受けた市当局は、慰霊碑を処刑場跡に建立した(74)。その完成式典には、市議会・教会・高等法院の代表者が列席し、簡素で小さな慰霊碑の礎石前面に、市議会の名で次のよう記された。「1831年5月26日、祖国の自由を希求したために、若きマリアナ・ピネーダが死刑に処せられた場所がここにある」。さらに市議会、教会およびグラナダ高等法院は、台座の裏側と左右側面に「高貴なる犠牲者を記念して」、「われらの宗教の聖なるシンボルがここにある」、「ここで処刑が繰り返されることがないように」とそれぞれ刻み込んだ(75)。

グラナダ選出の国会議員団は、1837年にマリアナの慰霊祭と記念行事の挙行を国会で提案すると、政府はマリアナ・ピネーダ没後6年周年に際し、「才能と美しさをかねそなえ、類まれな豊かな感性をもつ若き女性」としてマリアナ・ピネーダを称え、グラナダ市と県行政府に記念式典に関する政令を公布した(76)。マリアナ慰霊祭には、ミサの挙行、追悼集会、「愛国的演説会」および文化的な夜の集いが組織された。こうして、市議会はグラナダとそのヒロインを永遠につなぎとめるのである。

19世紀30年代後半に始まる公式記念行事は、1844年から54年の「穏健派の10年間」には実施されてなかった。マリアナ慰霊祭が復活するのは、54年7月革命によって進歩派が政権の座に返り咲いた時期、いわゆる「進歩派の2年間」(1854～56年)である。この時期に、37年と同じ記念式典が執り行われる。それまでヌエストラ・セニョーラ・デ・ラス・アングステシア教会に安置されていたマリアナの遺体は、最終的にグラナダ大聖堂の地下礼拝堂に安置された(77)。以来、大聖堂では毎年マリアナの命日にミサが執り行われることになる。しかし、1868年の9月革命に始まる「革命の6年間」(1868～74年)を除けば、市議会をはじめ公的機関は、20世紀の第二共和制の時期まで、記念行事を実施しなかった。「自由と秩序」の原理に立脚する有産市民的自由主義リベラリスモ・センシタリオ、すなわちイサベル2世の穏健派体制にとっても、「革命の6年間」のあとに確立される復古王政体制にとっても、マリアナはそのシンボルになりえなかった。

そうしたなか、マリアナ・ピネーダは、穏健派体制に対する批判勢力として登場する民主主義・共和主義のシンボルに転化しようとしていた。1850年代末、グラナダ・マラガ両県の農村部でカルボナリアの秘密結社が結成されたとき、マラガ県コルメナールの宿屋経営者の妻は「第2のマリアナ・ピネーダ」を自称し、また住民たちにもそう呼ばれていた(78)。マリアナやトリーホスが象徴する自由主義とその後の共和主義的民主主義には連続性がある。時代は変わっても、共通の価値を意味したからである(79)。

## 広場のマリアナ像

慰霊碑「十字架」とは別に、市議会は1836年にグラナダ美術アカデミアの提案を受けて記念碑建立を決定していた。それにふさわしい場所は、当初から指定されている。14年以来、対ナポレオン軍とのバイレーンの戦勝を記念して「バイレーン広場」の名で知られた市街区の空き地である(80)。ロマン主義の時代に描かれた美しい絵画から、その場所と当時の周辺の雰囲気をつかうことができる。それは19世紀の芸術家や旅行者たちに強烈な印象を与え、南スペインの異国情緒に寄せる彼らの好奇心を満たすに十分であった。周辺には、イスラーム時代からの城壁基部の一部が崩れた状態で残っていた。都市計画の一環としてグラナダ軍総督府が33年に整地事業を行い、その結果、人々の通行が容易になり、住民たちの集いの場になっていた(81)。



マリアナ・ピネーダ、グラナダの自由の殉教者



19世紀30年代のバイレーン広場(後のマリアナ・ピネーダ広場)  
Gallego y Burín, A., *Granada Guía artística e histórica de la ciudad*, 1998.



マリアナ・ピネーダ広場  
Busto, J., *Viaje al centro de Granada*, 1996.

記念碑建立式典は、1839年に厳かに執り行われ、マリアナ・ピネーダ像の礎石が据えつけられた。そして2年後、かなりの背丈の四角柱の台座正面に「グラナダは勇敢なるドニャ・マリアナ・ピネーダに捧げる」、背面には「自由の殉教者、1831年」、側面の左右にはそれぞれ「後世にその徳が称えられよう」「その名はひそかに不朽のものとなる」と記された。台座上部には円盤状の鑄鉄の月桂樹の輪が12個、四面に三つずつはめ込まれ、そのなかに自由の殉教者たちの名が処刑地と年号と一緒に刻まれていた。ダイオスとベラルデ（マドリッド、1808年）、少将ポリエル（ラ・コルーニャ、1815年）、中將ラシー（マヨルカ、1817年）、リエゴ大佐（マドリッド、1823年）、独立戦争の英雄マルティン・エンペシナード（ロア、1825年）、そしてグラナダのルミー（マラガ、1832年）、トリーホスとマンサナーレス（マラガ、1831年）、マドリッドの本屋ミヤール（マドリッド、1831年）など(82)。ちなみに、このときに次のようなロマンセが誕生した。「マリアナ！すべての女性たちのなかで、あなただけが聖別される。理想は聖別される。その理想があなたにこの台座を贈る」。自由の殉教者には、まるでグラナダの守護聖人のような一面も添えられた。



礼拝堂のマリアナ・ピネーダ —ファン・アントニオ・デ・カルボ(1862年制作) —  
*Sagasta y el liberalismo español*, Madrid, 2000. より

マリアナ・ピネーダ、グラナダの自由の殉教者



人民の大義の殉教者たち  
 Sagasta y el liberalismo español, Madrid, 2000. より  
 上から4列目、中央がマリアナ・ピネーダ

台座は据えられたものの、工事はそこから先に進まなかった。グラナダの歴史散策を著したブストによれば、イギリス人旅行者リチャード・フォードは、グラナダの「近代の聖なる殉教者」の青銅像が建立される日に思いをはせたという。フランスの旅行者、ダヴィリエ男爵は次のような証言を残した。「すでに青銅像が置かれているはずであるが、資金不足のためなのか、あるいは政治的情熱が冷めてしまったためなのか、台座は像を待ちわびている」(83)。事実、十九世紀半ばのグラナダでは「アリアナ像よりも時間がかかる」という言い回しが流行ったという(84)。

グラナダ市当局は、マリアナ像建立のために当初から市民に募金活動への協力を訴えていた。この目的で設置された委員会は、あらゆる機会を利用した。イサベル・ラ・カトリカ劇場で1841年に上演された仮面舞踏会、翌年のコンサート、55年にマラガで開催された闘牛祭りなどから得られた収益や市民の浄財のほかに、毎年恒例のように上演されるマリアナ・ピネーダを称える演劇興行で資金が集められたのである。

結局、待ち望まれたマリアナ像は、「革命の6年間」の最後の年、1873年5月にマリン・トーレによる最終設計で完成した。マリアナの命日の午前、市当局は、「祖国の自由に殉教した若くて美しく情熱的なマリアナ」の石像完成を祝う。午後には市議会および「市民」が組織した行列が、共和国義勇軍を先頭にカンポ・デ・トゥリウンフォからマリアナ広場まで市街区の主要な通りを行進した。行列が広場に到着すると、多くの花輪が捧げられ、マリアナの栄誉を称えて祝砲が打ち鳴らされる。そして夜には、市の音楽隊が奏でるなか、恒例の夜の集いが催された(85)。これが19世紀最後に行われた公式の記念式典である。

予定されていた青銅像は、資金不足のために石像彫刻となり、これが大いに不評を買ったが、ともあれ悲劇のヒロインの像が立ったのである。ブストによれば、新たな記念碑は時代の特徴を驚くほど反



広場のマリアナ像(筆者撮影)

映していた。「記念碑台座に聳える石像、その意図を宣言する碑文、建立技術、そのどれもが新古典主義の時代に完璧に合致し」ていた。19世紀半ばに主流となる趣向は、ある意味で新古典主義とロマン主義の融合だったからである(86)。

マリアナ・ピネーダの名は、グラナダのヒロインにとどまらない。「革命の6年間」にスペインの自由のためにたたかった「殉教者たち」に祭り上げられる。たとえば、「人民の大義の犠牲者」や「スペインの自由の殉教者」などのリトグラフ(87)には、カスティーリャのコムニダデスの反乱の犠牲者たち、ファン・デ・パディーリャ、ペドロ・マルドナード、ファン・ブラボをはじめ、独立戦争の英雄たちや、もちろん、リエゴ、トリーホスらと同列にマリアナ・ピネーダの肖像が描かれている。

他方、1856年から国家の庇護のもとで、2年に1度の国民絵画展が制度化されると、画家たちは、自由主義イデオロギーの称揚にふさわしいテーマをはるか遠い過去あるいは近い過去に見出した。絵画には教化的・倫理的メッセージが込められている。ピラール・デ・ミゲルが指摘するように、そのなかでもっとも卓越した価値は、祖国愛の称揚、宗教の保護、そして何よりも自由の擁護である(88)。マリアナ・ピネーダの絵画については、1862年にファン・デ・ベラ・カルポによる『礼拝堂のマリアナ・ピネーダ』が制作され、下院議事堂に飾られた。また同年には、イシドロ・ロサーノが描いた『監獄のマリアナ・ピネーダ』はグラナダ市庁舎の大広間を飾った。ちなみに、アントニオ・ヒスベルが制作した「トリーホスと仲間たちの処刑」は、金賞を受賞し、進歩派自由主義の代表的作である(89)。

民衆のレベルでは、ロマンセや演劇のなかでマリアナ・ピネーダは「美貌の悲劇の主人公」「称賛すべき女性」「勇気ある女性」、あるいは1856年に広場に隣接するセルバンテス劇場で上演された演劇「強き女性」して人々の記憶のなかに残る(90)。もちろん自由の象徴としてのマリアナ像は、19世紀を通じて変ることはいない。その間、マリアナ慰霊祭として始まった5月祭は、時代の移ろいとともにも市民の気晴らしのための夜の集いへと変容していく。広場と周辺には、色とりどりの蠟燭提灯が張り巡らされ、戸外のダンス・パーティーが華やかに繰り広げられる。こうして5月祭は、19世紀末にグラナダの祝祭暦のなかで1年の最初の夜祭、すなわち春を告げる恒例行事となった。その内容もコンサートが主流となり、コルドバの連隊の吹奏楽団やチュリアーナの楽団が参加した。広場周辺にはセルバンテス劇場や居酒屋が立ち並び、初めてのカフェ・カンタンテも誕生し、町でもっともにぎやかな民衆的な場所となる(91)。復古王政体制の時代、自由の殉教者の記憶は次第に薄れていった。しかし、グラナダで生まれた数々のロマンセは、スペイン各地で継承されていく(92)。

## マリアナの再発見

グラナダ市民が悲劇のヒロインの記憶を取り戻すのは、1931年の第二共和制成立のときである。くしくもマリアナが処刑されて100周年を迎える。マリアナ・ピネーダ記念行事実行委員会は、第

二共和国誕生の祝賀ムードのなか、記念行事を組織した。同年5月24日午前、記念行事を執り行うため、共和国政府を代表して法務大臣フェルナンド・デ・ロス・リオスがグラナダを訪れた。同日午前、彼を乗せた列車が到着すると、音楽隊がスペイン共和国の国歌「リエゴ賛歌」を演奏する。かつてグラナダ大学法学部教授であった大臣は、熱狂的な歓迎を受ける。駅から市庁舎までの市内のメイン通りは、群集で埋めつくされ、共和国旗がはためくなか、共和国誕生を祝う大勢の人々が社会主義者の大臣を先頭に行進した。大臣は市庁舎に到着すると、マリアナの名の付けられた二階大広間に入り、中央バルコニーから広場を占拠した住民の歓呼に応えた(93)。

5月26日、100年前と同じように、午前8時にグラナダの教会の鐘が一斉に打ち鳴らされる。大聖堂では、10時半から市議会をはじめ公的機関のすべての代表者が列席して、ミサが挙行された。



第二回反ファシスト国際作家会議のポスター  
詩人ガルシア・ロルカに捧げる『マリアナ・ピネータ』の公演(1937年7月3日)  
Rodrigo, A., *op. cit.* より

しかし午後になると、記念行事は様変わりする。記念祭実行委員会の呼びかけに応えた大勢の市民による「大示威集会」が始まる。それは、スペインの自由と共和国にとって栄光の行事である。午後5時に市庁舎前広場から出発した市民の行列は、カンポ・デ・トゥリウンフォを経由して市街区の主要な通りを巡り、最後にマリアナ・ピネーダ広場に到着する。フェルナンド・デ・ロス・リオスをはじめ、グラナダ市長、グラナダ大学学長、市議会議員団、その他の関係機関の代表者がこの示威集会と広場の夜の集いに参加した。そこには、ガルシア・ロルカの姿もあった(94)。

この時期、グラナダの新聞『エル・イデアル』紙は、1931年5月の半ばから連日「自由のヒロイン」の記事を掲載している。そこには、当然のことながら、様々なマリアナ像が出そろっている。共和主義者は、民衆のロマンセに受け継がれてきた自由の殉教者、絶対王政に対して敢然とたたかった闘士、そして自己犠牲愛の象徴としてマリアナを描く。社会主義者は「人民のための革命」に命を賭けたヒロインをマリアナに見る(95)。

他方、グラナダ祖国の友・経済協会が主催した記念行事では、グラナダ大聖堂司教代理が「マリアナ・ピネーダ、キリスト教徒として、グラナダ女性として」と題する講演会を主催した。それによれば、グラナダの小学校「ニニャス・ノブレス」で良きキリスト教徒にふさわしい教育を受けたマリアナは、キリスト教精神を体現する模範的人生を送り、神への信仰と自由への信仰を抱きながら、カトリック教会の胸のなかで死んでいった。自由と平等と法とは、キリスト教の美しき思想であり、マリアナはグラナダ生まれの神父スアレスが唱えた法と自由と平等の理論の象徴として評価された(96)。

政治形態が君主制であれ、共和制であれ、権力を掌握するのが左派であれ右派であれ、広場のマリアナ像の周囲は、毎年5月26日になると人々が集まっては花輪や花束で埋め尽くされる。マリアナの石像がそれぞれ異なる多様な価値を象徴するからだろうか。ひとつ共通するのは、マリアナがグラナダのシンボルだということである。そして共和国政府はマリアナ・ピネーダの肖像の切手を発行した。

## むすびにかえて

筆者は、かつてグラナダ大学留学の時期、グラナダの地方紙『エル・イデアル』に掲載されたマリアナ・ピネーダに関する記事を読んだことを思いだす。それは「忘却のグラナダの人々」の見出しで「カンボ・デ・トゥリフンフォの十字架とマリアナ・ピネーダの家」という題目がつけられている。19世紀のヒロインの紹介と家の保存を提案する内容だった。再び当時の新聞の切り抜きを取り出すまで、同記事の寄稿者が伝記作家アントニーナ・ロドリゴであることを失念していた。1979年11月9日付けの記事は、最後にこう結ばれている。「マリアナ・ピネーダの家・博物館は、歴史とグラナダの記憶のために生きた研究センター、図書館にできないだろうか」と。同年、マリアナ・ピネーダ生誕175周年に、アギラ通りにマリアナ・ピネーダ博物館の建設運動が本格化する。事情があったのだろうか、結局、記念館はサン・アントン通りの、マリアナが最後に過ごした場所に変更された。

時は流れ、グラナダの19世紀の悲劇のヒロインは、生誕200年の2004年にスペイン議会で顕彰され、下院議事堂に自由の殉教者としてその名が刻まれた。2年後、ヨーロッパ議会がマリアナを顕彰し、ストラスブルグEU議会場の正面入口にもその名が印された。「ヨーロッパにおける人権と自由のためにたたかったスペイン女性の貢献のシンボル」。これがその理由である。いつからか、マリアナ・ピネーダ記念館は、フェミニスト運動の拠点として「ヨーロッパ女性センター」となった。ちなみに、マラガにもメルセー広場にトリーホスを偲ぶオベリスクがあり、マリアナ・ピネーダと同様に、トリーホスの記憶の掘り起こしが試みられている。



註

- 1) Garcia Lorca, *Mariana Pineda, Doña Rosita La Soltera o El Lenguaje de las Flores*, Madrid, Espasa Calpe, 1976.
- 2) Rodrigo, Antonina, Mariana Pineda, Madrid, Alfaguara, 1965. この初版に続き、第2版は1977年、バルセローナの Plaza-Janes より、第3版は1984年、バルセローナの Círculo de Lectores より、第4版は1997年、マドリードの Compañía Libertaria より、第5版は2002年、グラナダの Comares より出版された。第4版にはドミンゲス・オルティスが緒言を寄せている。なお第2版から第4版には「自由のヒロイン」のサブタイトルが付されている。筆者が用いているのは、次の最新版である。Rodrigo, A., *Mariana Pineda. La Lucha de una mujer revolucionaria contra la tiranía absolutista*, Madrid, La Esfera de los Libros, 2005.  
なお、わが国では以下のものがアンオニーナ・ロドリーゴの伝記（第4版）を下敷きにマリアナ・ピネーダを紹介している。樋口正義「マリアナ・ピネーダ—祖国と自由と命を捧げた女性闘士」橋博幸・加藤隆浩編『スペインの女性群像：その生の軌跡』行路社、2003年、114—130頁。
- 3) Gay Armentero, J. y Viñez Millet, C., *Historia de Granada. La Epoca Contemporánea SigloXIX y XX*, t. IV, Granada, Don Quijote, 1982.
- 4) Serrano, Carlos, “Mariana Pineda (1804-31): Mujer, sexo y heroísmo”, Buirdiel, I. y Pérez Ledesma, M.( coords.), *Liberales, agitadores y conspiradores*, Madrid, Espasa Calpe, 2000, pp. 99-126.
- 5) Castells, Irene, *La Utopía insurreccional del liberalismo. Torrijos y las conspiraciones liberales de la década ominosa*, Barcelona, Crítica, 1989.
- 6) Hinojosa, Sergio, *Mariana Pineda, la heroína del silencio*, Granada, La isleta del moro, 2005. 歴史家による唯一の示唆的な論考に以下がある。Serrano, Carlos, *op. cit.*
- 7) ガイ・アルメンテロとピニェス・ミリエーの近代グラナダ史のほかに、以下の文献がある。Busto, J., *Viaje al centro de Granada*, Granada, Abaida, 1996; César Girón, *Miscelanea de Granada*, Granada, Comares, 1998; Viñez Millet, C., *Figuras granadinas*, Granada, El Legado Andalusi, 1997; Gallego y Burín, A., *Granada Guía artística e histórica de la ciudad*, Granada, Comares, 1996.
- 8) Barrios Rozúa, J. M., *Reforma urbana y destrucción del patrimonio histórico en Granada*, Granada, Universidad de Granada/Junta de Andalucía, 1998, pp. 23-26; Rodrigo, A., *op. cit.*, p. 17.
- 9) マリアナ・ピネーダの生い立ち、とくに洗礼、結婚、戸籍、親族関係および財産をめぐる訴訟関係に関連する事柄は、ロドリーゴによって十分に史料的に明らかにされている。これらにかかわる叙述には註を設けない。
- 10) Rodrigo, A., *op. cit.*, p. 60.
- 11) Alvarez Junco, J., *Mater Dolorosa*, Madrid, Taurus, 2001, p. 505.
- 12) Gay Armentero, J. y Viñez Millet, C., *op. cit.*, p.111.
- 13) プロムンシエントについては、Artola, M.( dir. ), *Enciclopedia de Historia de España*, t. 5, pp. 979-980 参照。わが国では以下の研究がある。渡邊太郎「1814～20年のプロムンシエントについて」『スペイン史研究』5、1989年、34—44頁。

- 14) Paredes, J. ( coord.), *Historia contemporánea de España (1808-1939)*, Madrid, Ariel, 1996, p.141. モンティエーホ伯爵の名前は、シブリアーノ・グスマン・パラフォクス・ポルトカレーロという。テバ伯爵でもある。グラナダでは前者の爵位で知られている。
- 15) Gay Armentero, J. y Viñez Millet, C., *op. cit.*, p. 114.
- 16) Rodrigo, A., *op. cit.* p. 52. カディス地方のカベサス・デ・サン・フアンの蜂起に際して彼の兵士たちが歌ったこの歌は、1822年4月7日の法令で国歌に定められた。
- 17) Paredes, J.( coord.), *Historia contemporánea de España (1808-1939)*, Madrid, Ariel, pp. 165-166. ロンドンには当時トリーホスやグラナダ出身の弁護士フアン・ルミーもいた。
- 18) Armentero, J. y Viñez Millet, C., *op. cit.*, pp. 115-116.
- 19) 1820年革命の時期に自由主義者が熱狂派と穏健派に分裂し、フリーメイソン、コムネーロ、カルボナリアなどの党派的な対立が表面化した。しかし23年以降、亡命中の自由主義者たちは、敵対関係を克服して統一的运动の必要性を意識して名称を変更した。そのひとつが「評議会」である。Castells, I., *op. cit.*, p. 37.
- 20) フアン・ルミーはグラナダ出身であるが、ロンドンを活動拠点としてリスボン、ジブラルタル、マラガ、カディス、グラナダなどで結社運動にかかわった。彼はロンドン評議会のメンバーであるが、同時に1826年にロンドンで結成されていた「ヨーロッパ立憲主義者会議」の書記長をカタルーニャ出身の軍人アントニオ・バイヘスとともに務めていた。同組織はイタリア・ポルトガル・フランスの自由主義者やイギリスの急進派などを構成メンバーとする緩やかな自由主義者の連合体である。スペインの警察当局は、「愛国主義活動の国際協会」(Centro internacional de actividades patrióticas)として把握されていた。詳しくは、Castells, I., *op. cit.*, pp. 38-41, 193-195.
- 21) Armentero, J. y Viñez Millet, C., *op. cit.*, pp. 115
- 22) Rodrigo, A., *op. cit.* pp. 21-22.
- 23) Domínguez Ortiz, A., *Prólogo a Rodrigo, A., op. cit.*, pp. 13-14.
- 24) Rodrigo, A., *op. cit.*, p. 62; Viñez Millet, *op. cit.*, p. 241.
- 25) *Ibid.*, p. 61. 伯爵夫人ドニャ・マヌエラは、1826年に誕生した娘エウヘニアをフランス皇帝ナポレオン3世に嫁がせている。なお、フランスの小説家メリメによる『カルメン』(1843年)は、このモンティエーホ伯爵夫人の聞き語りに基づくとされる。
- 26) プロデットは1834年に帰国が許され、正規軍に復帰してカルリスタ戦争に従軍、37年に戦死した。Rodrigo, A., *op. cit.*, p. 63.
- 27) *Ibid.*, p. 71.
- 28) *Ibid.*, p. 72.
- 29) *Ibid.*, p. 60; Viñez Millet, *op. cit.*, p. 241; César Girón, *op. cit.*, p. 304. ロドリゴの記述に依拠してビニェス・ミリャーやセサル・ヒロンは、無批判に「活動家」マリアナを強調している。例えば、マリアナが危険を冒してまで大胆な行動をとり、亡命者の必要に応じて偽造パスポートを準備するとされるが、史料上の根拠はまったくない。
- 30) Rodrigo, A., *op. cit.*, pp. 65-66. サラマンカは後日トリーホスの陰謀・蜂起に参加したとされる。1831年、マリアナの処刑から数ヵ月後、トリーホスのために国王に慈悲を乞うべく、マラガからマドリードの宮廷ま

で馬で馳せつけたという。Germán Bleiberg (ed.), *Diccionario de Historia de España*, t. III, pp. 549-550 参照。しかし、これは伝説かもしれない。カステルスの研究書には、サラマンカへの言及はまったくない。

- 31) Castells, I, *op. cit.*, p. 73.
- 32) テルトゥリアのこの側面については以下の論考が指摘する。González Troyano, A., “De las tertulias ilustradas a las tabernas románticas”, Varios, *Los Espacios de la Sociabilidad Sevillana*, Sevilla, La Fundación El Monte, 1998, pp. 11-33.
- 33) Hinojosa, S., *op. cit.*, pp. 17-18.
- 34) Rodrigo, A., *op. cit.*, p. 73.
- 35) *Ibid.*, pp. 74-76. ロドリゴによれば、1823年に捕虜としてフランスに連行されたフランシスコ・アルバレス・デ・ソトマヨルがスペインに帰国したのは1828年とされるが、これは単純な事実誤認であり、末尾に付されたソトマヨルの軍歴に関する史料（セゴビア軍史料館所収）が語るように1824年が正しい。
- 36) Castells, I, *op. cit.*, p. 196.
- 37) ソトマヨルの脱獄に関しては、ベドローサの報告書および本人の証言などがある。Rodrigo, A., *op. cit.*, pp. 78-83 y 227-236.
- 38) ベニャ・イ・アグアヨによるマリアナの伝記は、ロドリゴの作品中の随所で利用されている。アグアヨについては *Ibid.*, pp. 87-88 を参照。
- 39) *Ibid.*, pp. 94-95.
- 40) Castells, I, *op. cit.*, pp. 178-251. カステルスの成果を踏まえた以下の叙述も参考になる。Bahamonde, A. y Martínez, J. A., *Historia de España Siglo XIX*, Madrid, Catedra, 1994, pp. 167-171; Paredes, Javier, *Historia contemporánea de España (1808-1939)*, Madrid, Ariel, pp. 168-169; Fontana, J., *Historia de España: La época del liberalismo*, Vol.6, Madrid, Marcial Pons, 2007, pp. 135-136.
- 41) トリーホスは1791年マラガに生まれる。アルカラ・デ・エナレス士官学校に入学。カルロス4世の小姓を務めたトリーホスは、マドリードの5月2日の出来事に参加し、ビトリアではウエリントンとともにフランス軍とたたかい、若くして将軍に登りつめる。その後、異端審問所によって自由主義思想のために投獄され、中南米独立運動の鎮定の派遣を拒み、1817年のプロヌンシアメントに参加したために投獄される。1820年革命の際に釈放され、23年にカルタヘーナで「聖ルイの息子たち」に対する抵抗運動を指揮した。フランス軍に敗北したあと、ロンドンに亡命したトリーホスは、政治的宗教的ラディカリズムを特徴とする若きロマン主義グループ「ケンブリッジの使徒たち」にスペイン自由主義の英雄として崇拜される。イギリス青年たちが夢見るすべてをトリーホスが体現していたからである。彼らにとって、ウィーン体制下の意気消沈したヨーロッパで彼ほどの勇敢な人物はいない。トリーホスを追ってジブラルタルに赴いた若者もいれば、ロバート・ボイドのように彼の革命運動に財産を投じたものもいた。Garrido Muro, L., “El nacimiento de los partidos políticos en España”, Varios, *Sagasta y el Liberalismo Español*, Madrid, Fundación Argenteria, 2000, p. 196; Castells, I., *op. cit.*, p. 261.
- 42) Castells, I, *op. cit.*, pp. 189-190 y 209, 228-229. 6ヵ月後、トリーホスと行動をともにしたファン・ルミーも逃亡中にマラガ港で逮捕され、同じ場所で処刑された。
- 43) *Ibid.*, pp. 262-265.

- 44) 旗の制作はグラナダの評議会に依頼されたと考えられる。旗の存在が露見したのはある密告による。詳しくは、Rodrigo, A., *op. cit.*, pp. 99 y 150-151. 「法」とは 1812 年のカディス憲法を指している。
- 45) Barrios Rozua, J. M., *op. cit.*, p. 279.
- 46) Rodrigo, A., *op. cit.*, p. 129.
- 47) *Ibid.*, p. 159.
- 48) Castells, I., *op. cit.*, p. 195.
- 49) Rodrigo, A., *op. cit.*, pp. 124-125.
- 50) Madoz, P., *Diccionario geográfico-estadístico-histórico de España y sus posesiones de Ultramar* (Madrid, 1845-1850), Granada, de Edición Facsimil, Valladolid, 1987, p. 133.
- 51) Rodrigo, A., *op. cit.*, pp. 128-129.
- 52) *Ibid.*, p. 111; Serrano, C., *op. cit.*, pp. 105-106;
- 53) Rodrigo, A., *op. cit.*, p. 154; Serrano, C., *op. cit.*, p. 104.
- 54) Rodrigo, A., *op. cit.*, p. 126; *Enciclopedia de Andalucía*. マリアナ・ピネーダの項参照。
- 55) *Ibid.*, p. 145
- 56) *Ibid.*, pp. 144.
- 57) *Ibid.*, pp. 145-146. マリアナが受ける刑罰は、「ガローテ」と呼ばれる通常の処刑法である。公開の処刑台の中央部に柱を垂直に立て、それに取り付けられた小さな椅子に死刑囚を座らせ、柱後部で固定されたドリル付きの鉄環を死刑囚の首にはめ、鉄輪に取り付けられた把手を廻してドリルが死刑囚の頸椎・延髄にぐい込ませ死に至らしめるというものである。
- 58) Armentero, J. y Viñez Millet, C., *op. cit.*, p. 118.
- 59) Rodrigo, A., *op. cit.*, p. 153. 引用の日付は誤認だろう。マリアナ・ピネーダが逮捕されたのは 3 月 23 日ではなく 3 月 18 日である。
- 60) Hinojosa, S., *op. cit.*, pp. 31-32.
- 61) Bahamonde, A. y Martínez, J. A., *op. cit.*, p. 177.
- 62) Rodrigo, A., *op. cit.*, p. 153.
- 63) Serrano, C., *op. cit.*, p. 109.
- 64) Castells, I., *op. cit.*, p. 229.
- 65) Serrano, C., *op. cit.*, pp. 99-126. さらに、セラーノによれば、マリアナの社会的身分は、他の女性陰謀家とは異なり男性に近い。法制度的にも経済的にも、既婚女性は夫の従属の下に配属されていたが、マリアナは未亡人であるがゆえに、普通の女性が置かれた身分とは異なる。19 世紀の寡婦は、自らの行動や財産維持の責任を負うし、彼女自身の家で起こるあらゆる事柄にも責任を負わねばならない。19 世紀初頭、未亡人は法制度的に家長であった。このように私的・公的領域、女性・男性という二面性がマリアナ個人にそなわっていた。
- 66) Serrano, C., *op. cit.*, p. 124. なお、ガルシア・ロルカは、マリアナ・ピネーダの従兄弟、フェルナンド・アルバレス・デ・ソトマヨルがマリアナの恩赦を訴えた手紙を国王に出したことは知らない。
- 67) Castro Alfin, D., “Simbolismo y ritual en el primer liberalismo español”, Alvarez Junco, J. ( coord. ),

*Populismo, caudillaje y discurso demagógico*, Madrid, Siglo XXI, 1987, pp. 287-314.

- 68) *Ibid.*
- 69) Hinojosa, S., *op. cit.*, pp. 45-46 ; Rodrigo, A., *op. cit.*, pp. 193-194.
- 70) Hinojosa, S., *op. cit.*, p. 48.
- 71) Rodrigo, A., *op. cit.*, p. 195.
- 72) Garrido Muro, Luis, “El nacimiento de los partidos políticos en España, 1833-1845”, *Sagasta y el liberalismo español*, Fundación BBVA, 2000, pp. 165-204.
- 73) *Ibid.*
- 74) Barrios Rozua, J. M., *op. cit.*, p. 70; Gallego y Burín, A., *op. cit.*,
- 75) Casa de Mariana Pineda” por Rodrigo A, *El Ideal*, 9-XI-1979.
- 76) Rodrigo, A., *op. cit.*, pp.195-196.
- 77) *Ibid.*, p. 197.
- 78) Guerola, Antonio, *Memoria de mi administración de Málaga como Gobernador de ella desde 6 de diciembre de 1857 hasta el 15 de febrero de 1863*, dirigida por Suárez F., Sevilla, Guadalquivir, p. 1173.
- 79) Morales Muñoz, M., “Cultura y sociabilidad política en el liberalismo radical”, Caro Cancela, D. ( ed. ), *El Primer Liberalismo en Andalucía ( 1808-1868 )*, Cádiz, Universidad de Cádiz, pp. 249-295. 1931年12月、マラガの「祖国の友・経済協会」の主催でトリーホス処刑100周年記念行事が催され、招かれた哲学者ウナムーノは、講演で民衆的自由主義の伝統のなかに1931年の共和主義的民主主義を位置づけている。
- 80) Gallego y Burín, A., *op. cit.*, p.
- 81) César Girón, *op. cit.*, 295; Busto, J., *op. cit.*, p. 84.
- 82) Rodrigo, A., *op. cit.*, pp. 202-203; César Girón, *op. cit.*, p. 294.
- 83) Busto, J., *op. cit.*, p. 86
- 84) *Ibid.*, p. 84.
- 85) Rodrigo, A., *op. cit.*, p. 205.
- 86) Busto, J., *op. cit.*, p. 86.
- 87) *Sagasta y el Liberalismo Español*, p. 102, 199. に掲載されている。
- 88) Miguel, Pilar de, “El espíritu liberal y la pintura del siglo XIX en España”, *Sagasta y el Liberalismo Español*, pp. 149-161.
- 89) *Ibid.*
- 90) Rodrigo, A., *op. cit.*, p. ; Busto, J., *op. cit.*, p.86.
- 91) Busto, J., *op. cit.*, p. 89.
- 92) ロマンセの流布については、Rodrigo, A., *op. cit.*, pp. 167-189. 参照。
- 93) *Defensor de Granada*, 27-V-1931.
- 94) *Ibid.*, 25-V-1931.
- 95) *Ibid.*, 23-V-1931.
- 96) *Ibid.*, 24-V-1931.